

曇無讖訳『涅槃經』における「秘密藏」

森 山 結 希

問題の所在

古来、東アジアの仏教思想に大きな影響を与えてきた漢訳大乘『大般涅槃經』（以降、『涅槃經』）は、現存する三本の内の二本が梵本からの訳本と言われている。残りの一本は上記二本を編集したものである。⁽¹⁾ 梵本から翻訳したと言われる二本の『涅槃經』は、曇無讖訳（以降、「大本」と法顕伝訳（以降、「六卷本」）の二本である。六卷本は大本に先んじて中国に伝来、翻訳されたが、大本の前半五品（序品―一切大衆所問品）の内容までで完結するものとなっている。

六卷本と大本は同内容を持つ經典であるが、六卷本は大本の前半部分（前十卷分）までの内容までしか記されていない。この構成の異なりが大本・六卷本の最も大きな相異であろう。では、大本・六卷本の両本の共通する部分において、その内容は全て同じかというと、そうではない。『涅槃經』としての流れは共通しつつも、大本では増広箇所が存在する影響からなのか、随所に六卷本には全く存在しない教説や引用を確認できることが、先学によって明らかにされている。以下に、おおまかにその先学による指摘を提示する。（以降、品名は便宜上三十六卷本のものを使用する。）

・純陀品の二種施食

・哀歎品の秘密蔵

・哀歎品と四相品の伊字三点

・菩薩品の本有今無偈

右に記した四つは、織田「二〇一二」を参照したものである。⁽²⁾

漢訳『涅槃經』を含めた大乘『大般涅槃經』の研究は数多く存在するが、主だった大本・六卷本間の比較研究としては、まず布施「一九四二」が挙げられる。布施「一九四二」は、大本・六卷本間に確認される哀歎品と四相品に見られる「伊字三点」と菩薩品の「本有今無偈」が六卷本には全く存在しないことなどの相異を指摘している。

次に、河村「一九七〇」は、布施氏の研究成果をふまえて、大本・六卷本の比較箇所を経文を示しながら相違箇所を更に細かく提示している。

次に、織田は「二〇一〇」と先に参照した「二〇一二」において、「秘密蔵」や「本有今無偈」を採り上げている。そして、大本の構成において後半部に繋がる思想との関わりを指摘して、大本の構成に関する研究の新たな切り口を示唆した。

以上が先学の研究成果の全てではないが、大本・六卷本間の比較を行った研究として、そして両本が単なる同本異訳の関係ではない可能性を指摘する研究として、留意すべきものを挙げた。これらの先学の成果の中でも、本稿では大本の構成に関わる術語として織田「二〇一〇」、「二〇一二」において注目されている「秘密蔵」を考察の対象としたい。この「秘密蔵」という語句は、布施以降の漢訳『涅槃經』間の研究では必ずと言っていい程、大本・六卷本間の相異として指摘されている「伊字三点」に関わる語句である。そして大本『涅槃經』内では重要な役割を果たし

ている可能性が指摘されている。しかし、大本・六巻本の比較を通して「秘密蔵」の役割に関しては充分に考察されてはいない。そのため本稿では、比較を通して大本における「秘密蔵」の在り方を確認したい。又、本稿では大本の「秘密蔵」の存在に注目しつつ、これに由来する『涅槃經』中に見られる大本における「仏性・如来性」の語句の用例に関する特徴に対しての指摘を試みてみたい。

大本における「秘密蔵」

大本に「秘密蔵」の語句が最初に確認出来るのは哀歎品である。この「秘密蔵」が大本において現れる発端となるのは、純陀品において「如来常住」思想、「如来は無常なものではなく、常住である」という考え方が示される箇所にある。これは『涅槃經』の根幹をなす思想であり、大本・六巻本における示され方には若干の差はあるものの純陀品において示されている。そして純陀品において、「如来常住」という思想が初めて明かされるのであるが、大本ではその直後に「如来常住」思想を、「秘密蔵」として扱い始めるのである。大本では純陀品で示され始めた「如来常住」の教えに対して、続く哀歎品において比丘衆によって「秘密の教え」を意味する「秘密蔵」という語句を使用し始める。そしてその「秘密蔵」の内容の開示が求められるのである。その場面は次の通りである（以下の引用文における傍線、網掛けは筆者が付した）。

【大本】

（比丘衆）「世尊よ、譬えば医王の善く方薬を解し、偏えに秘方を以て其の子に教授して、其の余の外の受学の者に教えざるが如し。如来も亦爾り。独り甚深秘密の蔵を以て偏えに文殊に教え、我等を遺棄して顧愍せられず。如来は法に於いて応に慳慓無かるべし。彼の医王の偏えに其の子に教えて、外來の諸の受学の者に教えざるが如

くに。彼の医の普く教えること能わざる所以は、情に勝負存するが故に秘惜有るなり。如来の心は終に勝負無し。何の故に是の如く教誨せられざるや。唯だ願くは久しく住まりて般涅槃したまうこと莫れ」と。(大正十二、三七六 a、三二二八行)

右の傍線部(以後、この大本にのみ存在する箇所を「偏教文殊」と呼称する)に前後する一連の箇所は、純陀品において明かされた「如来常住」の説が、比丘衆によって「秘密藏」と受け取られている場面である。この箇所は先に挙げた先行研究でも述べられている通り、六巻本には全く存在しないものである。

『涅槃經』における「如来常住」思想の初出には、大本・六巻本の間で異なりはあるものの、純陀品における最後の布施者となった純陀と文殊師利との問答において、その思想が示され出揃うことには違いはない。その問答では終始、文殊師利が純陀を導く様な姿勢を見せており、『涅槃經』の物語上において初めて示されたはずの「如来常住」思想を、文殊師利は確かに理解している様子が窺える。この物語の流れに沿うように、「偏教文殊」前後の比丘衆による釈尊への譬喩を交えた訴えは、「如来常住」という新たに示した教えを教えずに、我々(比丘衆)を見捨てて入滅しないで欲しい」という趣旨のものばかりである。このことから大本では、右に示した「偏教文殊」の「独り甚深秘密の藏を以て偏えに文殊に教え」という流れを作り、大本『涅槃經』に「秘密藏」という術語を導入しているものと考えられる。

次に大本において、比丘衆によって「秘密藏」とされた「如来常住」思想に対して、比丘衆の「如来常住」の教えを開示して欲しい」という要望が釈尊によって承認される箇所を確認する。当該箇所直前には釈尊が「比丘衆の疑念を晴らした後に涅槃する⁽³⁾」ということを述べ、比丘衆の要望に応える中で「秘密藏」が「伊字三点」として示される箇所である。これも大本にのみ存在するものである。

【大本】

（釈尊）「諸比丘よ、譬えば大地、諸山の藥草を衆生の為に用いるが如し。我が法も亦爾り。妙善を生じて甘露の法を出だして、而して衆生の種種の煩惱病の良藥と為す。我、今当に一切衆生及び我が子四部の衆をして、悉く皆秘密藏中に安住せしむるべし。我も亦復当に是の中に安住して涅槃に入るべし。何等を名づけて秘密の藏と為すや。猶伊字の三点の如し。若し並べば則ち伊を成ぜず、縦も亦成ぜず。摩醯首羅の面上の三目の如し。乃ち伊の三点を成ず。若し別なるも亦成ずるを得ず。我も亦是の如し。解脱の法も亦涅槃に非ず、如來の身も亦涅槃に非ず、摩訶般若も亦涅槃に非ず。三法各異なるも亦涅槃に非ず。我、今是の如きの三法に安住して、衆生の為の故に涅槃に入ると名く。世の伊字の如し」と。（大正十二、三七六c、六一一七行）

右の様に「偏教文殊」における比丘衆からの要望が叶えられる様子が見て取れる。具体的な釈尊からの回答としては、「一切衆生及び我が子四部衆」に対して「秘密藏」とされた内容を示し、またその内容に沿って自らも涅槃に入るといふものである。そして、この場面で初めて明かされる「秘密藏」の内容とは、摩醯首羅の眼の配置の様な、悉曇文字の伊字の三点の様な関係として、「解脱」「如來身」「摩訶般若」の三つが備わる状態における涅槃というものである。そしてその涅槃とは、常住でありつつも衆生教化の方便としての涅槃であることを大本では示している。

これに対して「秘密藏」という語句を使用しない六卷本は、大本の「伊字三点」が無いために、直接的に「如來常住」に対する比丘衆の疑問に應えてから衆生教化のための涅槃に入るといふ流れになっている。

次に哀歎品の「伊字三点」に続き、四相品においても大本は、「伊字三点」を「秘密藏」の内容として説いている。この四相品における「伊字三点」は哀歎品のものとは構成が異なる。それは哀歎品の「解脱・如來身・摩訶般若」↓四相品の「解脱・涅槃・摩訶般若」となっており、三点に例えられた内の一つである如來身が涅槃へと変化している

のである。この変化はおそらく『涅槃經』の進行上の問題であろうから、特に二つの「伊字三点」が異なる「秘密藏」を指すということではないと考えられる。そして、この「伊字（三点）」の使用は四相品の「伊字三点」までである。それ以後は六卷本に存在しない大本後半部（二―四〇卷分）を含めても一切使用されていない。

多少、横道にそれだが、筆者は四相品までの大本の文脈を踏まえてその意味を捉えるのならば、大本において「伊字三点」として開かれる「秘密藏」は、『涅槃經』の思想を納めた「法藏」という意味で使用されていると考えられる。

大本における「秘密藏」の用例

四相品の「伊字三点」までの「秘密藏」は文脈上、大本が哀歎品において示した「秘密藏」と理解してよいだろう。では、その後に散見される「秘密藏」やそれに類する語句はどうであろうか。

織田「二〇一〇」は、哀歎品において提示された「秘密藏」の異称と考えられる語句をいくつか挙げている。⁽⁴⁾それは「微密藏」「如来秘藏」「秘密之藏」などである。これら以外にも、「如来微密無上法藏」「無上秘密之藏」「如来微密深奥藏」「如来甚深密藏」「如来甚深秘密藏」「如来真法藏」「如来微密宝藏」「如来微密秘藏」「如来密藏」などの「秘密藏」の異称と思われる語句が見られる。これ等の異称を含めた「秘密藏」は、大本『涅槃經』では後半部の光明遍照高貴徳王菩薩品にまで確認できる。⁽⁵⁾また、これ等の語句は六卷本との比較が可能である大本前十卷分のうちでは菩薩品まで散見される。

これ等の語句の用例の中で、大本が哀歎品以来の「秘密藏」として使用していることが理解できる事例が存在する。それは四相品の「伊字三点」の後に見られるものであり、『涅槃經』の主な対告衆である迦葉菩薩が、四相品に至るまでに明かされた『涅槃經』の教理を「何故、秘密にしていたのか」と釈尊に問う場面である。

【大本】

爾の時、迦葉菩薩、仏に白して言さく。「世尊よ、仏の所説の如く〈諸仏、世尊に秘密蔵有り〉と。是の義は然らず。何を以ての故に。諸仏、世尊は唯だ密語有るのみにして、密蔵有ること無し」(大正十二、三九〇b、一五一七行)

右の場面は『涅槃經』四相品の文脈上での新たな展開の冒頭部である。六卷本では大本における「秘密蔵」の語句は見当らず、それに当たる「隱秘之法」の語を使用しており、表現は異なるが大本・六卷本共に「秘密にして隠していた教え」ということを表している。そして大本では右の箇所以降の文脈でも「秘密蔵」やそれに類する「如来秘蔵」の語句を使用している。それは哀歎品で定義された「秘密蔵」に対して、迦葉菩薩が「秘密蔵」の「蔵」ということに対して「秘密にして隠していた」との意味として採り上げ、「どうして諸仏、世尊に秘密の蔵があると云うのか」という疑義を呈する文脈においてである。この文脈の中で大本は「如来には秘密にして隠していた教えなどないはずである」という問題提起や、それに対する釈尊の回答の中で、「秘密蔵」やそれに類する語句を使用しているのである。

また、「如来の秘密にしていた教え」の有無についての文脈上で、「秘密にする」「隠す」と表現する語に相異が見られる。それは、大本は「衆生に対して秘密にしていた」という哀歎品からの文脈において「秘密蔵」もしくは「蔵」の語句を使用するのに対して、六卷本は「隱覆」の語句を使用している点である。この両本の表現の差は「秘密蔵」の存在の影響であると思われる。

以上のことから、大本は「伊字三点」に関連する事例以降にも「秘密蔵」の術語を使用していることが理解できる。

大本「秘密藏」に対応する六卷本「如来性」

『涅槃經』における大本固有の「秘密藏」の用例を、哀歎品での「秘密藏」の定義後から經典の構成に沿って確認してきた。これまで挙げた事例では大本の「秘密藏」に対して、六卷本は「秘密藏」に相当する語句が存在しないか、相当する語句が統一されていなかった。しかし、大本の「秘密藏」が使用される文脈において、六卷本では「如来性」の語句を充てている箇所が存在するので、その箇所を確認してみたい。

該当箇所は『涅槃經』四諦品に存在する。この品は仏教の基礎的な教理である四聖諦（苦集滅道）を、『涅槃經』の教理を基に説き直す箇所である。例えば苦諦は、苦であること自体が真理ではなく、『涅槃經』が示す「如来常住」という在り方を知らずにいることが苦である、としている。この様な『涅槃經』による苦集滅道の説き直しを行う箇所、その中の滅諦を説く箇所に該当箇所が存在する。

〈四諦品における比較〉

【大本】（大正十二、四〇六c、七行―一七）

苦滅諦とは、若し多く空法を修習し学すこと有れば、是れを不善と為す。何を以ての故に。一切法を滅するが故に。如来の真宝藏を壊するが故に。是の修学を作す、是れを修空と名づく。苦滅を修する者は、一切の諸の外道等に逆らう。若し空を修するを是れ滅諦と言わば、一切外道も亦空法を修すれば応に滅諦有るべし。

【六卷本】（大正十二、八八三a、二―一二行）

苦滅諦とは、若し空を修行せば、一切は尽滅し如来性を壊す。若し空を修行するを滅諦と名づければ、彼の諸の外道と義を相い違う者も、亦空を修行すれば滅諦を得るや。

説有りて「如来蔵有りて見るべからずと雖も、若し能く一切煩惱を滅除せば、爾らば乃ち入るを得」と言うが若し。若し此の心を発さば一念の因縁により諸法中に於いて自在を得。

当に知るべし、一切皆如来常住の性有り。諸の結縛を滅し煩惱を永く尽き、如来常住の性を顕現す。一心を起して便ち妙果を得。常樂自在にして法自在王と名づく。是れを苦滅聖諦を修行すと為す。

若し如来密蔵を無我、空寂と修習せば、是の如くの人は無量世に於いて生死中に在りて流転し苦を受けん。若し是の如きに修を作さざる有れば、煩惱有ると雖も、疾く能く滅除せん。何を以ての故に。如来秘密蔵を知るに因るが故に。是れを苦滅聖諦と名づくなり。

若し復、如来性を修行して空、無我の相を作さば、当に知るべし、是の輩は蛾の火に投ずるが如し。滅諦と名づくとは、是れ如来性なり。是れ如来は実に、一切無量煩惱を滅除す。所以は何ん。是れ如来性に因るが故に。是の如く知る者は、如来平等の滅諦を知ると為す。若し此れと異なる者は滅諦を知ると名づけず。

右の比較表から分かることは、大本で「秘密蔵」の異称と考えられる「如来真宝蔵」「如来蔵」「如来密蔵」「如来秘密蔵」などの語句が、六巻本では「如来性」「如来常住之性」となっているということである。つまり、大本の「如来」という語句を「秘密蔵」として読んだ場合、六巻本の「如来性」と対応すると言える。また、ここでの「秘密蔵」は、六巻本の「如来性」「如来の常住という在り方」という意味を内包する語として読める。更には他の『涅槃経』の思想（伊字三点）「常樂我淨」⁽⁷⁾「大乘經典を指す語句として」など）をも含む語句として理解することが可能となるであろう。

ただし、この箇所「秘密蔵」の異称と思われる語句の中には、「如来蔵」という訳語が確認できる。この「如来

蔵」等の語句は「如来真宝蔵」を除いて、大本の「秘密蔵」としてではなく、いわゆる如来蔵思想の「如来蔵」として理解することもできるだろう。しかし、大本の文脈を通して見た場合には、「如来蔵」の訳語を含めた「秘密蔵」の異称と思われる語句は、やはり哀歎品で初めて提示された「秘密蔵」として捉えるべきではないのだろうか。何故ならば、四相品以降四諦品に至るまでの大本では、四依品、邪正品でも「秘密蔵」の語句が確認できるからである。この様に、哀歎品での定義や「伊字三点」としての内容開示以降も継続して「秘密蔵」の語句を使用しているため、この箇所でも同様であると思われる。このことを踏まえれば、比較表の大本の「如来蔵」の使用箇所を含めて、「如来」という語句が見られるそれぞれの文は、文脈上「秘密蔵」として読むことが妥当であると考ええる。

また、比較表の「如来蔵」の語句を「秘密蔵」と読むということを踏襲した場合、大本の他の箇所も同様に「秘密蔵」と読み取ることができないのではないだろうか。その箇所は四諦品以降に存在し、同じく「如来蔵」の訳語が確認できる大本の如来性品冒頭である。この箇所も先と同様に「秘密蔵」と読み取れるのではないだろうか。その箇所を次に挙げてみたいと思う。

〈如来性品冒頭部比較〉

【大本】（大正十二、四〇七b、七一一行）

（迦葉菩薩）「世尊よ、二十五有に我有りや不や」と。仏言わく、「我とは即ち是れ如来蔵の義なり。一切衆生に悉く仏性有り。即ち是れ我の義なり。是の如くの我の義は、本従り已来、常に無量の煩惱の為に覆わる。是の故に衆生は見ずること能わず」と。

【六卷本】（大正十二、八八三b、一四一一七行）

迦葉菩薩、復、仏に白して言さく、「世尊よ、如来に我有りて、二十五有に有りと為すや無しと為すや」と。仏、迦葉に告げたまわく、「真実の我とは、是れ如来性なり。当に知るべし一切衆生に悉く有り。但だ、彼の衆生は無量煩惱に覆蔽せられて現ぜず」と。

この箇所も先の四諦品と同様に六卷本の「如来性」に、大本の「秘密蔵」が対応する事例ではないかと考えられる。一見して分かるのは、大本では「如来蔵」「仏性」の語句が確認できることである。これに対して六卷本では「如来性」の語句のみ確認できる。先の四諦品と同様であるのならば、この箇所での大本は「秘密蔵」の内容として「仏性」を開示していると読むことができる。そうであるのならば、六卷本「如来性」は大本「秘密蔵」に対応するものと考えられる。冒頭部に続いて、『涅槃経』は如来性品冒頭以降では凡そ四つの譬喩を示しながら、我（の義）と形容された「仏性・如来性」がどの様に衆生と関係するのかを説いていく。その説き方は、『涅槃経』哀歎品において大本が「秘密蔵」として表現した、「如来常住」思想を示したという經典の文脈を念頭に置いたものである。そして「仏性・如来性」と衆生とが無関係ではないことを示した後に、六卷本には存在しない「秘密蔵の本当の意味を教える」という意図の場面が大本では挿入されている。それが次の場面である。

【大本】

仏言わく、「善男子よ、汝今、如来秘蔵真実義を知るを欲するや不や。」と。迦葉言く、「爾り。我今、実に如来秘蔵之義を知ることを得んと欲す」と。（大正十二、四〇九a、二二―二三行）

この箇所以降の大本では「秘密蔵」の内容として、常住である如来の在り方である「仏性・如来性」と衆生とが関係する理由を説いていく。この様な文脈を持つことから、大本如来性品冒頭の「如来蔵」はいわゆる如来蔵思想の「如来蔵」ではなく、「秘密蔵」を意味する語句として読むべきであると考えられるのである。

この様に大本において重要な役回りを果たす「秘密蔵」であるが、六卷本の「如来性」に対応する語句の全てが「秘密蔵」なのかというところではない。これまで大本における「秘密蔵」の語句の多くが、六卷本では「如来性」

に対応するということを述べてきた。ところが六巻本の「如来性」に対応するものは、大本では「秘密藏」をはじめ「仏性」や「如来性」の三種に大別できるのである。このことから、次に大本と六巻本における「秘密藏」の有無を契機とする「仏性・如来性」の用法の相異に注目したい。

「仏性・如来性」の用例に関する仮説の提示

先に六巻本『泥洹經』の「如来性」に対応する大本での用例が三種存在することを指摘したが、大本『涅槃經』は一般的に「仏性」思想の印象が強いものだと思われる。「仏性」を含めた如来藏思想においては、『如来藏經』や『勝鬘經』などの經典において、「如来藏」の語句をもつてその思想を代表するものとされている。しかし、大本『涅槃經』においてはそうではない。そもそも『涅槃經』においては「仏性・如来性」の訳語と共に、先にも示した「如来藏」の訳語も使用されている。^[1]それは仏陀跋陀羅訳『如来藏經』（四二〇年訳）も同じであるが、後に訳された同本異訳の関係にある不空訳『如来藏經』（八世紀中。正確な年代は不明）においては「如来藏」の語句しか確認できず、『如来藏經』は「如来藏」を主題とした經典であると思われる。^[2]

では、『涅槃經』は一般的に言われるような「仏性」を主題とした經典なのかというと、少し問題がある。確かに『涅槃經』の大本においては「仏性」の語句が頻出する。しかし先にも確かめたが、大本の「秘密藏」「仏性」「如来性」の語句に対応する語句は六巻本においては「如来性」であった。また、大本と同様に「仏性」「如来藏」の語句も使用される六巻本においては、主に見られるのは「如来性」なのである。これ等のことを明らかにするために「仏性・如来性」の使用数を品毎に比較した表を次に挙げる。この表によって大本・六巻本における「仏性・如来性」の使用の相異を確認してみたい。

〈漢訳『涅槃經』—「仏性」「如来性」、品毎類出表〉

六卷本		四十卷本（北本）				三十六卷本（南本）		
仏性	如来性	仏性	如来性	品 名		仏性	如来性	品 名
				寿命品				序 品 (大身菩薩品含む)
		2			2			純陀品
								哀歎品
				金剛身品				長寿品
								金剛身品
				名字功德品				名字功德品
1	2*	6	4	如来性品	6	4		四相品
1	1	2			2			四依品
10	3	18			18			邪正品
	6*							四諦品
	1	2			2			四倒品
5	55*	47	11		47	11		如来性品
1	4*	3	3		3	3		文字品
	5	5	2		5	2		鳥喩品
	1*		6*			6*		月喩品
2	22*	24	2		22	4		菩薩品
	3*			一切大衆所問品				一切大衆所問品

・〈漢訳『涅槃經』—「仏性」「如来性」品毎類出表〉中に見られる「*」は、「仏性・如来性」であると断定し難い箇所を含むことを示すものである。

・六卷本を基に編集された南本の品名毎に分けて「仏性」「如来性」の使用数を示した。又、大本・六卷本の構成の異なりを明示するために大本の品名も併せて示した。

上記の類出表の様に、如来性品や菩薩品などの「仏性・如来性」の使用数が多い品が確認できる。この様な品をはじめとして、多くの品において、大本では「仏性」を、六巻本では「如来性」を主に使用しており、使用傾向が相反しているのである。その他、邪正品の用例では六巻本は「如来性」と「仏性」の両方を使用しているが、大本では「仏性」の語句のみ使用するという例も存在する。

以上、表を基にして、『涅槃経』大本・六巻本の傾向を簡潔に述べるなら、大本は「仏性」を主として説く傾向があり、六巻本は「如来性」を主とする傾向がある經典であると言えるだろう。ただ先程も述べたが、大本・六巻本はいずれも「仏性」「如来性」の両語句を使用している。そのため、表に表れた数字のみではなく、經典の文脈を通してのその傾向を確認しなければならない。

次に、両本は「仏性」「如来性」をどの様に使い分けているのかについて、大本の文脈を中心にその傾向を捉えてみたい。大本と六巻本を比較しながら読み進めて行くと、大本では「仏性」「如来性」それぞれに別の意図を含ませて配置していることが理解できる。その顕著な事例を幾つか挙げて確認していく。

〈如来性品〉

（比較箇所として、「貧女宝蔵の譬喩」「毒塗乳洗の譬喩」「力士額珠の譬喩」「雪山柴味の譬喩」の四つの譬喩を例示したかったが、紙幅の都合上比較箇所を全て挙げることは出来ないため、例示したい箇所の出典を左に示しておく。）

【大 本】（大正十二、四〇七b、一一―四〇八c、三行）

【六巻本】（大正十二、八八三b、一七―八八四a、二〇行）

まず、如来性品冒頭部（前掲、三三頁の比較表）に端を発する四つの譬喩に用例の相異が見られる。この四つの譬喩

は、品の冒頭において「二十五有に存在する」とされた「仏性・如来性」が衆生の視点ではどのような状態であるのかを説く譬喩であろう。六巻本での四つの譬喩の範囲では、全て「如来性」の語句が使用されている。しかし、大本の相当箇所では「仏性」の語句を使用している。これは品の冒頭において「秘密藏」の内容として「悉有仏性」と示された影響によると考えられる。つまり、大本の如来性品前半部では、衆生に関わる事例においては「仏性」を使用する傾向を持つのではないだろうか。このことを四つの譬喩の一部である、「力士額珠の譬喩」の解説部分を挙げて確認する。

【大本】（大正十二、四〇八a、二四一b、二二行）

（釈尊）「善男子よ、一切衆生も亦復是の如し。善知識に親近すること能わざるが故に、仏性有ると雖も皆見ること能わず。而も貪婬、瞋恚、愚痴の為に覆蔽せらるるが故に、地獄、餓鬼、阿修羅、旃陀羅、刹利、婆羅門、毘舍、首陀に墮し、是の如く等の種種の家中に生ず。心の起す所の種種の業縁に因りて、人身を受け聾盲、瘡癰、拘攣、癰跛なると雖も、二十五有に於いて諸の果報を受けるなり。貪婬、瞋恚、愚痴の心を覆いて仏性を知らざること、彼の力士の宝珠の体いなるを呼ぶに失去すと謂うが如し。衆生も亦爾り。善知識に親近するを知らざるが故に、如来微密の宝藏を識らず、無我を修す。喩えば

【六巻】（大正十二、八八三c、二九一八八四a、七行）

（釈尊）「一切衆生も亦復是の如し。各各皆に如来の性有り。悪知識に習いて婬、怒、癡を起し、三惡道に墮す。乃至、二十五有に周遍して種種の身を受く。如来の性、摩尼宝珠は、煩惱婬、怒、癡の瘡に没在して、所在を知らず。世俗の我に於いて無我を修し、如来良医の方便密教を解せず、無我の想を作し、真実の我を知ること能わず。是れに於いて如来は復方便を為す。無量煩惱の熾然を滅して、如来の性を顕現、開示せしむるなり」と。

ば非聖は、我有りと説くと雖も我の真性を知らざるが如し。我が諸の弟子も亦復是の如し。善知識に親近するを知らざるが故に、無我を修学するも亦復無我の処を知らず。尚自ら無我の真性を知らず、況や復能く有我の真性を知らんや。

善男子よ、如来が是の如くに、諸の衆生に皆仏性有るを説くこと、喩えば良医の彼の力士に金剛宝珠を示すが如し。是の諸の衆生は諸の無量億煩惱等の為に覆蔽せられて仏性を識らず。若し煩惱を尽くせば、爾の時、乃ち證知すること了なることを得。彼の力士の明鏡中に於いて其の宝珠を見るが如し。善男子よ、如来秘藏は是の如くに無量にして不可思議なり」と。

右記の様に、大本は「仏性」、六卷本は「如来性」の語句を使用している。これは六卷本には「秘密藏」が存在しないことが関係しているであろう。六卷本では如来性品冒頭において真実我と形容された「如来性」が衆生に存在すると表現している。このことが冒頭以後に存在する「力士額珠の譬喩」を含めた、真実我たる「如来性」と衆生との関連性を明かす四つの譬喩に対しても影響していると考えられる。そして六卷本が四つの譬喩において「仏性」の語句を使用しないという点は、大本との明らかな相異であると考えられる。

如来性品はこの様に、冒頭から始まる衆生と「仏性・如来性」との関連性を四つの譬喩を通して説いていく。その

後、大本では「如来秘藏真実義」を明かすという幾度目かの「秘密藏」の開示が始まる。以降の如来性品は、「我と無我の性相に二無し」⁽¹³⁾と明らかにし、『般若経』を前提としていることを示し、⁽¹⁴⁾「五味相生の譬喩」⁽¹⁵⁾を通して、「仏性・如来性」について明らかにしていく流れとなっている。

〈月喩品〉

月喩品は、月の出没、満ち欠け等を如来に例えながら、「仏性・如来性」を開示した後如来の在り方を改めて説く品である。この品で大本は「仏性」の語句を使用せず、「如来性」の語句のみを使用している（前掲三六頁の頻出表を参照されたい）。先の如来性品冒頭部の譬喩は、衆生に対する教化を目的としたものであつて、そのために「仏性」の語句を使用したと想定できる。一方、この品での「如来の性は実に生滅無し。衆生を化せんが為の故に生滅を示すなり」⁽¹⁶⁾や

【大本】（大正十二、四一六c、一四一―一六行。）

衆生は皆、「法、僧、毀壞し、如来も滅尽す」と謂う。
而るに如来性は真実に変無く破壊有ること無く、世間に
随順して是の如くを示現す。

【六卷本】（十二、大正十二、八九〇a、一四一―一六行。）

正使、天魔の億百千数も、亦法を断じ、僧を壊すことを
得ること能わず。是の故に如来の法身は真実にして損壞
有ること無く、損壞の相を現じて世間に随順す。

などの、如来の在り方を主題とする場合には、「如来性」を使っているのではないかと考えられる。又、六卷本もこの品の趣旨は同様であるが、「如来性」の語句を殆ど使用していない。以上、大本月喩品における「仏性・如来性」の用例を確認した。このことから大本は直接的に如来に言及する事例において、「如来性」を使用する傾向があるの

ではないかと考えられる。

〈その他〉

以上の大本を中心とした如来性品前半部と、月喩品における「仏性・如来性」の使用傾向を踏まえて、大本・六卷本の他の箇所における用例を確認してみたい。

【大本】（大正十二、三九九a、六―七行）

広く衆生に悉く仏性有るを説く。

【六卷本】（大正十二、八七七c、六―七行）

善く衆生各各、自分に如来性有るを解す。

これは、如来性品において如来の真我とされた「如来性」や「秘密藏」の内容としての「悉有仏性」、これ等を開示する以前の四依品で確認できる用例である。この箇所は『涅槃經』において、衆生に「仏性・如来性」が有ると示す「悉有仏性」思想に通ずる一文が最初に確認できる箇所である。「仏滅後には『涅槃經』の教えを誹謗する者達が現れるだろう⁽¹⁷⁾」と、釈尊が予言する文脈に端を発し、「正法や戒が失われていく様な時代には、どの様な者が、如何にして『涅槃經』の教えを守り、伝えていくのか⁽¹⁸⁾」と迦葉菩薩が問い、それに対する釈尊の回答の中に、「悉有仏性」に類似する一文が示されるものである。この用例では大本が「仏性」、六卷本が「如来性」となっており、如来性品の用例の様に大本が衆生を主として教説を展開する場合には「仏性」を使用している様子が窺える。また六卷本は「如来性」となっており、大本の様な「仏性・如来性」の使い分けがなされていないことも確認できる。

以上、全ての事例には及ばなかったが、大本・六卷本の語句の使用傾向の差が顕著に表れている事例を挙げる事が出来たかと思う。これ等の事例を振り返ると、大本には衆生に対して「仏性」を、如来に対して「如来性」を、と

いう使用傾向が有ることを理解できるだろう。一方、六卷本は、大本の様に「仏性・如来性」を使い分ける場面もあるのだが、大本ほどは明確な理由に基づいて使い分けておらず曖昧なまま使用している。

では改めて、大本における「秘密藏」の存在が、何故大本と六卷本において「仏性・如来性」の使用傾向の相異に関わるのかを考えてみたい。

大本における「秘密藏」の語句は、『涅槃經』前半部の様々な思想を内包する語句であった。その様な語句が存在するために、大本では「仏性・如来性」を使用する場面を、六卷本に比べて明確に分けることが可能となっているのではないだろうか。

六卷本では、大本での「秘密藏」の役割を「如来性」が果たしていると考えられる箇所もあり、『涅槃經』の趣旨」としてなのか、「如来の在り方」を表すのか、などの判断を下し難い場合が存在する。

しかし大本では、「如来常住」と「仏性・如来性」との思想の間に、これ等の思想を包摂する「秘密藏」という概念を立てることで、大本後半部への展開を見据えた視点を開くことも可能となり、場面に合わせての使い分けが可能になっていると考えられる。そのため、大本はこの「秘密藏」を導入することによって、『涅槃經』が意図する教義を明確に表現しようとしていると思われる。そしてそれは、六卷本と対応する大本前半部分、それ以降での教理の展開への基盤となるものであると考えられる。この故に、大本の「秘密藏」の導入とは、『涅槃經』大本にのみ見られるいくつかの思想を、經典に挿入する要因となっていると言えるであろう。

おわりに

大本における「秘密藏」の概念は、六卷本にはない特徴であると言える。これは、大本と六卷本とが単なる同本異訳という関係ではないことを示すものである。東アジアにおいては、大本、曇無讖訳が『涅槃經』を代表するものと

して扱われているが、果たして大本を大乗『涅槃經』の基準的なものとして扱ってもよいのであろうか。何故ならば、六卷本では教理を展開する以前には「仏性・如来性」の語句を使用することはない。しかし、大本では「秘密藏」の語句を提示するのに先立って、如来の在り方を説示する以前から「仏性」の語句を使用しているからである。そして、その意図とは、如来の在り方や「仏性」に關しての重要な教説に対して、それを先取りして重要であることを強調しているものと思われる。また推測ではあるが、このことを大本の「秘密藏」によって「仏性・如来性」の語句を適宜に配する点を踏まえて考えるならば、大本の翻訳当時の状況を表しているとは考えられないだろうか。仮にそうであるならば、それは大本の原本が『涅槃經』の中でもかなり終盤に成立したということをも、もしくは原本を大本として漢訳する際に何等かの意図を持って増広したことを示すものだと考えられる。

注

- (1) 『涅槃經』の翻訳事情について、又は再治本(三十六卷本。通称、南本)の編集事情については、布施「一九四二(六四—一六頁)、横超「二九八二」a(二六—四二頁)、織田「二〇一〇」(七一—二〇頁)等に詳しく、そちらを参照されたい。

- (2) 織田「二〇一二」(六五—六七頁)参照。織田は「伊字三点」を哀歎品と四相品の二つに分けて示しているが、本稿ではまとめて記載した。

- (3) この箇所は、純陀や文殊師利を除いた会座に参集した者達が、釈尊の涅槃を聞いて悲嘆にくれていることに対しての、釈尊の対応である。六卷本は「秘密藏」を使用しないため、その導入部である「偏教文殊」は存在しないのであるが、經典の進行上の問題は無いと思われる。(大本)「復次に比丘よ、若し疑惑有れば、今皆当に問うべし。……今当に諮問すべし。我当に隨順して汝の為に之を斷ずべし。亦当に汝の為に先の甘露を説き、然る後に乃ち当に涅槃に入るべし。」(大正十二、三七六、九—一五行)(六卷本)「復次に諸比丘よ、若し疑惑有れば、今皆当に問うべし……是の如くの種種の法中に諸の疑惑有れば、今皆當にとうべし。當に汝等の為に隨順して之を説くべし。當に汝等の為に不死の門を開き、然る後に滅度せん。

是の故に、汝今心に疑う所を現じて、各各当に問うべし」(大正十二、八六一b、二六一c、二行)

- (4) 織田「二〇一〇」における「秘密藏」の異称の提示箇所。「如来秘藏」「微密藏」(三八頁)、「如来秘藏」「秘密之藏」(一〇頁)。

- (5) 大本『涅槃經』における「秘密藏」の語句の使用に関して、光明遍照高貴德王菩薩品(以降、徳王品)まで確認できる。このことは、織田「二〇一〇」(一一三—一四頁)において、徳王品を最後に「秘密藏」に類する語句が使用されなくなることが指摘されている。

- (6) (大本)「云何ぞ当に諸仏世尊に秘密藏有りと言ふべきや」(大正十二、三九〇b、一九二〇行)。

- (7) 『涅槃經』における「常樂我淨」の説が最初に確認できるのは、哀歎品において「伊字三点」を示した直後である。大本・六卷本間の構成においては、「伊字三点」に関わる記述を除けば、概ね同様の進行上において確認できる。このことから大本は「秘密藏」に「常樂我淨」という如来の在り方を含んでいることが想定される。また、六巻本の「如来性」も、大本の「秘密藏」と同様に「常樂我淨」を含む語句として使用していると思われる。

- (8) 特に邪正品では、「秘密藏」を「方等大乘經典」であるとの見解を示している(大正十二、四〇五b、五一六行)。この様に「秘密藏」を「大乘經典を指す言葉」としての用例は、邪正品以降に散見されるようになる。

- (9) 大本において「如来藏」の語は四諦品において初めて確認できるものである。比較表の大本、その二番目の段落に存在する「如来藏」の訳語がそれである。また、四諦品で確認できる「如来藏」は、大本『涅槃經』における「秘密藏」であると判断することが難しい。何故ならば、冒頭の「如来藏有りて見るべからず」の一文は如来藏思想の「如来藏」を連想し易いからである。しかし筆者は、その後の「一切煩惱を滅除せば、爾らば乃ち入るを得」とある箇所を、「秘密藏」の教えを理解する、もしくは哀歎品の「秘密藏中に安住せしむ」に対応する様に「秘密藏の教えの中に入る」と理解することも可能なのではないかと考えている。

又、この箇所に関して高崎「二〇〇九」では「この一節では、すべて(如来藏)の語が用いられ(五回)‘dhatu’が用いられていないのは、何か拠るところがあるのであろうか」(一七三頁)と、チベット訳を主とした訳文を示しながら述べられている。しかし、六巻本では「如来藏」に該当する語句は全て「如来(常住之)性」であり、この箇所における訳語が漢訳二本とチベット訳ではそれぞれ異なっている点を指摘しておきたい。

(10) この四つの譬喩は順番に、「貧女宝蔵の譬喩」「毒塗乳洗の譬喩」「力士額珠の譬喩」「雪山楽味の譬喩」の四つである。詳しくは、横超「一九八一」b(二二一—二二三頁)、織田「二〇一〇」(五〇—五三、六〇—六三頁)などを参照されたい。

(11) なお、先に挙げた4つの譬喩の名称は、織田「二〇一〇」に依った。
大本における「如来蔵」の訳語は4箇所確認できる。その全てが大本四十巻中の六巻本と対応する前半十巻分の範囲である。

(12) 本文に挙げた幾つかの漢訳經典では「如来蔵」「仏性」「如来性」などの訳語が使用されている。その訳語の使用傾向を簡単に述べておく。

菩提流志訳『勝鬘夫人会』(『大宝積經』第四十八会)(大正No.310)「如来蔵」のみ使用。

求那跋陀羅訳『勝鬘師子吼一乘大方便方広經』(大正No.353)「如来蔵」のみ使用。

曇無讖訳『大般涅槃經』(大正No.374)「如来蔵」「仏性」「如来性」すべて使用。

法顯訳『大般泥洹經』(大正No.376)「如来蔵」「仏性」「如来性」すべて使用。

仏陀跋陀羅訳『大方等如来蔵經』(大正No.666)「如来蔵」「仏性」「如来性」すべて使用。

不空訳『大方広如来蔵經』(大正No.667)「如来蔵」のみ使用。

(13) (大本) 大正十二、四一—a、八行。

(14) (大本)「我、先に摩訶般若波蜜經中に於いて、我と無我の二相有ること無し、と説くが如し」(大正十二、四一—a、九—十行)。(六巻本)「我、般若波蜜大經に不二を説く。彼に是の如く我、非我の不二を説く」(大正十二、八八六b、二四—二五行)。

(15) この譬喩の名称は横超「一九八一」bに依った。この譬喩についての詳細は、横超「一九八一」b(二二三頁)、織田「二〇一〇」(七八—七九頁)、「二〇一六」(三〇〇—三〇二頁)等を参照されたい。

(16) (大本) 大正十二、四一—a、二六—二七行。六巻本での対応箇所と思われる箇所には「如来性」の使用は確認できない。

(17) (大本) 大正十二、三九八a、一三一—一五行。(六巻本) 大正十二、八七六c、二八一—二九行。

(18) 『涅槃經』のみに限定した表現とも解釈できるが、『涅槃經』以前の初期仏教や大乘などの教えを含むものであると考えらる。

(19) (大本) 大正十二、三九八a、一五一一七行。(六卷本) 大正十二、八七六c、二九一八七七a、一行。

〈参考文献〉

横超慧日「二九八二」a『涅槃經と浄土教 仏の願力と成仏の信』(平樂寺書店)

横超慧日「二九八二」b『涅槃經―如来常住と悉有仏性』(サーラ叢書 平樂寺書店)

小川一乘「二〇〇二」『新国訳大蔵經 央掘魔羅經・勝鬘經・如来藏經・不増不減經』(大蔵出版)

織田顕祐「二〇一〇」『大般涅槃經序説』(東本願寺出版)

織田顕祐「二〇一二」『涅槃經における無我と我的教説』(『日本佛教學會年報』第七十七号)

織田顕祐「二〇一六」『因中説果』と『因中有果』の違い―『起信論』理解の中心点―(『東アジア仏教學術論集』第4号)

東洋大学東洋学研究所

河村孝照「二九七〇」『大乘涅槃經における大般泥洹經と大般涅槃經との比較研究』(『東洋学研究』第四号 東洋大学東洋学研

究所)

下田正弘「一九九三」『藏文和訳『大乘涅槃經』(I)』(山喜房佛書林)

下田正弘「一九九七」『涅槃經の研究―大乘經典の研究方法試論―』(春秋社)

高崎直道「二〇〇九」『高崎直道著作集 第四卷 如来藏思想の形成I』(春秋社)

布施浩岳「一九四二」『涅槃宗の研究 前篇』(一九七三)『涅槃宗の研究 前篇』復刻版(国会刊行会)